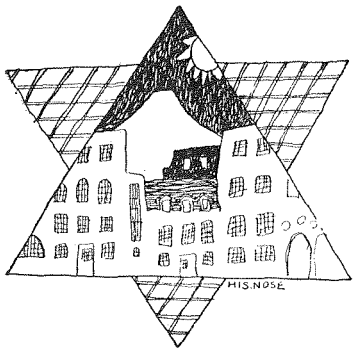

電氣事業調査委員補充

— 五大電力代表總登場 —

電氣事業調査會は周知ではあらうが、電力統制に對する政府の諮問機關として前內閣時代に設置されたものである。

○

政府は十月二十六日、電氣事業調査會の委員補充を任命發表した。愈々電力統制に手を付けかけたと見做す事が出來る。

前內閣——政友內閣の電力統制方針が露骨な獨占主義、それも東京電燈擁護？かとも思はれる樣だつた統制方針に對して、その反對黨民政黨の內閣、その統制方針は果してどんなものであらうか。

廟堂に立籠つてから三月にして、政府は、先に却下されたる日本電力關東進出に對して、認可の指令を與へた。それには例令窮屈な制限條件が付されてあるとは云へ、ともかく政友內閣に對する一種の反對意識の表明である。

○

だからこそ、現內閣の電力統制方針は、イクオールチヤンスに於ける自由競爭のある期間を通過してからの獨占區域確立にあるのではあるまいか、とも取沙汰させられる。

○

さて發表された委員の顏觸は、役人側の交代は變哲はない。たゞ山本忠興博士、中島久万吉男、杉浦武雄氏と、臨時委員の方では日本電力社長池尾芳藏氏、宇治電社長林安繁、大同電力社長增田次郎氏、五大電力代表の總登場に興味はつながれる。

○

殊に民政黨代議士杉浦武雄氏は、炯違ひの帝大獨法出身の法學士だが、眞面目な研究心の厚いがい博の人である、電業調査委員を仰せ付かるや、遞信省から專門書をドツサリ借りて讀破しても猶足らずその道の外國書を買ひ集めて眞率な研究を積んでゐる該調査會の議論中、恐らく氏の論が中心的要素を持つものであらうと想ふ。而も自由主義的な思想を持つてゐるらしい氏が、獨占主義か、自由競爭主義かが、現實問題となつてゐるに對して、如何なる電力統制理論を提起するか、興味ある人である。

○

殊に前回では侃々諤々の議論で舞臺裏からさへ、常に孤軍奮鬪してゐた池尾芳雄氏がこの度は同じ立場で思ふさまの戰鬪が出來る譯だ。池尾氏の向ふ所立ち合ひ得る敵はないと云はれてゐる程の、池尾氏である、流石の松永氏でさへも、名古屋に於ては、鉾を收めて妥協したものだ。その猛勇が檻を破つて自由な立場で戰はんとしてゐる。

○

その池尾氏は近江國の產明治十一年の生れである東京帝大の法科を二番で出た、無論銀時計組である型の如く、助敎授の光榮のある役目を强要されたがやがては、それを投げ出して大阪商船計理課長となつてマドロス群に投じたといふ特々氣骨の人である それよりも氏の氣骨は、學生時代に見る事が出來るその頃支那では黃興の第一次革命が起つてゐた溢れ出るやうな氏の鬪爭意識は沸然俠奮を感じて黃興の幕下に馳せ參じて彈雨の下を潛つて來たものである。

○

日本電力が創立されると、氏の性格が電力そのものと合致したのか、電力界に入つて苦鬪十年山岡氏亡き後の同電を背負ふて、今日の盛名をかち得たのである。而も氏の意氣、益々天に沖するものがある。

行詰まれる電力界の打開力は、正に氏に於て把握してゐると思ふ。

○

かくして今回の電氣事業調査會も、金解禁期確定した後の日本の產業のピンチを、乘切り得る絕大の原動力の完成を期待し得やう。